# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Valence of Japanese verbs, 1

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石綿, 敏雄, ISHIWATA, Toshio
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001024

## 人間の精神活動を意味する動詞の用法

### ――言語情報処理のための動詞句の分析その1――

### 石 綿 敏 雄

#### 0. この研究の目的,内容の概要と結論

これは、昭和45、46年度文部省科学研究費、総合研究(A)「日本語の電子計算処理のための基礎的研究」(代表者岩淵悦太郎)に関する報告の一つである。

この研究の動詞の用法を中心に、日本語の用語および文法について研究することを目的としているが、分析の手法は日本語文の構造解析をすることを第一の目的として、一種の pattern recognition を行なうアルゴリズムをつくるための基礎資料をつくることを目的としている。このため、名詞を含む動詞の expression すなわち動詞句の構造を、その動詞句を構成する用語の語い的文法 的分類と照合しつつあきらかにすることを主な方法としている。

したがって一種の,文法・語い両論にまたがる synthesic な研究である。

この研究は報告46に発表した「助詞『に』を含む動詞句の構造」と目的・方法を同じくするが、「が」を中心として扱い「に」のばあいよりも、より多く他の助詞との関連にふれることに努力している。一つの助詞だけでなく、総合的な動詞などの dependency あるいは、Valenz といわれるものにふれてゆきたいと思う。

もう一つの相違点は、変形文法の手法を、より多くとり入れたことである。 これは一つには「が」格がもっている性質にも基づくところが大きいが、情報 処理ということを目的の一つとして大きく立てると、その方が便利であるとい うこともあるからである。しかしその手法の取り入れ方は、まだ十分ではない。 前述「に」のばあいには材料は主として新聞であった。新聞用語調査の用語 分析の一環の色合いがこかったが、今回のは、科学研究費補助金で作成した用 語総索引夏目漱石「三四郎」を主材料としている。

述語句の分析とすると、いろいろの角度からのテプローチが考えられる。との調査研究は、電子計算機が行なう構文解析のプログラムの辞書に使用される言語情報の基礎となるものでるから、一部分の問題をくわしく分析するという方向より、全体を全体的な立場からみるということが、まず必要である。そこてここでは資料に出てきた動詞などを広く取りあげて整理してみることに重点を置いた。部分的な問題に別に考えるのがよいわけであり、細かい分析を別の機会に行なってみたい。

この研究の資料を作成するためにも、さきに開発した"COBOL-KWIC"が使用された。ただし計算機が busy であるため、研究資料は必ずしも多くない。すなわち「三四郎」と毎日新聞夕刊半年分(KO)とを使用した。新聞と小説であるが、材料の相違が用法の相違にはっきり現われていることもある。たとえば漢語サ変の受身形など、新聞に特徴的であり、「いう」などの用法は小説に多くなっている。全体とすると、「三四郎」の方が、この分野の用語は多い(標本の全用語は毎日新聞の方が多いのに)。

はじめに述べたように、この研究は日本語の「体言」+「が」+用言」といういわば述語句の構造を調べることをまず第一の目的としているのであって、 (したがって資料も助詞「が」のKWICを中心に使用)このために、まず述語の種類を次のように分ける。

動詞

形容詞 • 形容動詞

名詞+copula

このなかで、量的にみても多く、かつ基本的なものとしてまず動詞をとりあげることにするが、これを更に「分類語彙表」の分け方にしたがって

抽象的関係

精神および行為

自然現象

の三者に分け、そのなかで第2の「精神および行為」「人間の精神活動」を取りあげてみた。この類の特徴は主格が大体人間およびその関係を示す語がくることである。この次にはできれば「自然現象」をとりあげてみたい。これでは精神活動のばあいと逆に「月が輝く」「水がこおる」「風が吹く」「雨が降る」「花が咲く」のように自動詞文において主語が自然物(1.5 の名詞,あるいは1.4)になる(一Belebt)ことが予想される。他動詞文や使役文では人間やその他のものが「が」の前にくるという点で、特徴がありそうである。はじめの「抽象関係」ではさまざまのものが「が」の前にくる可能性があり、これが一番複雑であろうから、取り扱いは最後にまわすことにする。

「が」格の連語の研究はすでに根本今朝男氏の「名詞と形容詞」の発表があり、高橋太郎氏の主語、述語についての全般的で精密な研究が行なわれているが、後者の発表は残念ながらまだ行なわれていない。早い機会に発表されることが期待される。

筆者がこの分析でとろうとしている方法は次の通りである。

言語情報処理における、構文の pattern recognition の一つの基礎的な手順として構造解析をほどこそうとするのであるが、そのためには構文辞書に書きこまれている構文規則を照合しつつ解析するという手法が一般的である。このためにはこの expression あるいはシンタグマを構成する単語と、その構文規則への参加のしかたが明らかになっていなければならない。構文解析のプログラムには transformational rules あるいは、context sensitive rules が取り扱いうることを期待するとすれば、一つの方法としてこのような変形生成文法の取り扱いをとり入れてよいだろう。そうすると、動詞を中心とした、 Kasusgrammatik の考え方に近い立場をとって、「が」格を中心としながらも他のValenzを広く考慮して、分析してゆくのである。 (ただし時間の関係で、他の格についての分析は不十分である)。分析にあたってはソ連の伝統的な文法における用語の種類を重視する方法をとり入れ、日本語での「分類語彙表」を活用することにした(意味の分類番号は同書による)。このような意味的なものが構文のなかに活用されるのは最近の生成文法でも同様であって、シンタグマのなかに置かれる用語の syntaktisch なあるいは semantisch なメルクマー

ルを明らかにしていこうというのである。ただ、分析のための時間が十分にとれないので、この部分は十分に手がつけられていない。それから表層構造をまず分析することに目標を置き、深層構造にはあまりふれなかった。

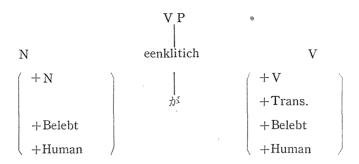
かくて、文法は大体「に」のばあいと同じように、 KWIC を使用して動詞を選び、「が」格の用例を「分類語い表」の分類に従って分けてみた。表層構造の上で「が」でなくても、たとえば「は」「も」などになっているものも(「三四郎」だけで、新聞についてはできなかったが」、参考としてあげることにした。また表層構造では構文上直接の関係がなくても、Deletions-transformation の前に存在していたはずのものもことで一部分(気がついたものだけであるが)取りあげてみた。

このような分析の結果,次のような結論が得られた。

この種類の動詞を自動詞と他動詞に分けると、他動詞文では主として人間あるいはその関係の語が主格になるが、自動詞文では、対応のあるものでは、他動詞の目的語であったものが主格になる。

そういう Selektionsbeschränkung がある。対応のないものでも主格が人であるものが多い。受身文可能動詞文「たい」希望文,「てある」状態文,でも他動詞の「を」の前の語が主格になる。

他動詞文のメルクマールを書くとすれば,



となる。これは全般的なもので,一つ一つの動詞については別にもっと詳細に書くことができる。自動詞文ではVが-Trans となり,Nは-Belebt あるいは+Belebt となる。

実はこれを詳細に書くべきであるが、そのためにはなにぶん、データが少な

すぎるし、時間の余裕がない。今後 COBOL-KWIC のオペレーションを時間の許すかぎり行なってデータをふやしてゆき、「に」のばあい同様、メルクマールをくわしくすることに心がけるつもりである。その意味で、本稿もまた全く中間的な報告である。

以下,「三四郎」と「毎日新聞夕刊半年分」の範囲内での「が」格を中心とした動詞の、それも精神活動を中心とした動詞の用法について述べたい。

- 1. 他動詞文
- 2 子の他

の順である。他動詞(t)と自動詞(i)の対応は番号で示した。用例は

〇 三四郎

△ 毎日新聞夕刊

で示し,原則として省略しなかった。したがって用例数が,一種の計量的な記述の役目も果している。一つの文の構造は discourse のなかでさまざまに他の文の構造に影響されている(文献10)。そこでやや長い用例をひいたばあいもある。

「三四郎」の KWIC 作成の電子計算機オペレーションを国語研の研究補助 員花井夕起子嬢に、 KWIC のアウトプットを解釈して分類語彙表を使用しつ つあらい分類をする作業を国語研のアルバイタ平野幹子嬢にお願いした。

#### 1. 他動詞

「分類語彙表」のグループ番号順にならべて自他を照合しつつ通し番号をつけてある。(V3-1t) のV3 は動詞の分類番号を意味する。

(V3-1t)「感覚・疲労・睡眠」などの「感じる」「感じとる」動詞(2,300)。 主として人間およびその関係の名詞と結合する。

△ソ連がベトナムをめぐり核戦争の危機を切実に感じとっている △それは、日常の表面的な生活に没しきったわれわれが、人間の本質があばき出されときに感じる、ある種のショックであるのかもしれない。○露悪家同志がお互に不便を感じてくる

表層構造で「が」以外の助詞の例。主として「感じる」であるが,あるいは「1.3の名詞+を」あるいは「名詞を形容動詞に」「ようにと」などと結びつく。
○三四郎はたえず一種の圧迫を感じていた。○三四郎は往来の真中で扶ぐたす〉けなき苦痛を感じた。○男はむしろ甘い苦しみを感じた。○三四郎は凝と坐っていにくい様な束縛を感じた。○四時間,五時間と経つうちにそろそろ退屈を感じ出した。○実際のところはこれほど痛切に不足を感じていなかったそうである。○しかし両方とも迷惑を感じているけしきがさらにない。○その中に生息している動物はどこかに不足を感じる筈だ。○一種の屈辱をかすかに感じた。○ベーコンの二十三頁に対しても甚だ申訳がない位に感じた。○三四郎はこの奥行のある景色をゆかいにかんじた。○三四郎はよし子と一緒に歩くよりはよし子と一緒に野々宮の下宿で落ち合わなければならぬ機会をめいわくに感じた。○三四郎はこれがために独逸語に対する敬意を少し失ったように感じた○三四郎は自分の今の生活が熊本当時のそれよりもずっと意味の深いものに

(V3-2t) 「気分・情緒」などの動詞(2,301)。「うれしがる」「気づかう」 「なぐさめる」など。主体は人間。

○母がうれしがる ○われわれがなぐさめてやらんといかん。「がし以外の助詞で担われている例」「とし「をしをとる。「気づかうし」

なりつつあると感じた。

「が」以外の助詞で現われている例。「と」「を」をとる。「気づかう」などの 内容対象を示す語がくる。「なぐさめる」の前の「を」は人をうける。

○ことによると寝ぼけて停車場をまちがえたんだろうと気遣いながら窓から 眺めていると,決してそうではない。○三四郎を遠くに置いて却って遠くにい るのを気遣いすぎた眼付きである。○爺さんはこんなことを云って,しきりに 女を尉めていた。三四郎の一節のもたらす意味よりも,その意味の上にはいか かる情緒の影をうれしがった。

(V3-3t)「対人感情」の動詞「重んじる」「重視する」「かわいがる」「愛さる」など (2,302)。「が」の前は人間あるいはその関係の名詞がくる。別に助詞「を」をとることが多く,その前にもやはり人間を意味する名詞がくるこ

とが多い、そうでないばあいもある。

△かれら**が**との協定をほんとうに尊重するのなら、△とうしてソ連**が**対日関係を最近特に重視する根拠は ○あのくらい研究好きの兄**が**, このくらい自分を可愛がってくれるのだから

次の例は「が」がなく、名詞の用法は間投的ともとれる。

○君, あの女を愛しているんだろう

他の例。

○自分を研究すればするほど,自分を可愛がる度はへるのだから

(V3-5t) 「志望・友省」の「望む」「待つ」「祝う」「かえりみる」など (2,3041)。 人間を意味する名詞が主として「が」の前にくるが,人間関係の 名詞のこともある。

△各グループの代表が即時選挙を望むなら △米国がもし本当に平和を望むなら △三味線引きの裕次郎が、死ぬまでこれを世に出すのを望んでいたが、△おふくろがわたしの卒業をたのしみに待っている △麻生磯次学長が「皆さんおめでとう」と卒業を祝い ○「広田先生じゃ無かったんだな」と三四与が次郎を顧みた ○美弥子がよし子を顧みていった

この類は別に助詞「を」を取ることが多く、その前に人間の行為関係、あるいは人間自身を意味する名詞がくることが多い。「待」のとき、+loc の「に」がくることがある。「が」でない例。

○三四郎は事実上不可能のことを望んでいる。○過去を顧みて ○隣の連中は余程世間が広い男達と見えて、左右を顧みて、彼処には誰がいる、此処には誰がいるとしきりに知名人の名を口にする。○よし子は美弥子をかえりみた。○三四郎は与次郎を顧みた ○だれも顧みるものがない ○表に待っていた三四郎 ○なんなら、私一寸行ってくるからここに待っていらっしゃい○それよりここにまっていた方が手間がかからない。○りんごを持って停車場に待っていたんだろう。○美弥子は待っていない。

(V3-7t) 「まね・学習・慣れ」などの動詞 (2,305), 「手がける」「学ぶ」

「おぼえる」など。

△今井正監督**が**始めてテレビ映画を手がける △山田は次第に木の名前も 覚えて行った

あとの例は「は」になっている。

(V3-8t)「思考・認知・知解」の動詞(2,3060),「思う」「考える」「疑う」「悟る」「知る」など。人間が主として主語になるが、人間関係の名詞のこともある。

○第一向うがそうえらいともなんとも思ってやしない ○三四郎が色々考えるうちに △授業ポイコットが続く早稲田の学生たちが,知恵をしぼって考え出した ○与次郎の言草のうちで,自分がまだ考えていなかった部分だけが判然〈はっきり〉頭へ映っている △ダンナの新市長が中央政府の駐留がもはや必要でないと考えるならば ○そうしないと,与次郎が広田の食客〈いそうろう〉だという事を知っているものが疑を起さないとも限らない△故国はるかに異郷に生活を送る孤独な男女二人がこの大都市の酒場で偶然に知り合い,そして結ばれてゆく ○三四郎が美弥子を知ってから ○与次郎が野々宮君を知ろうとは思いがけなかったから ○序に与次郎が,どう叱られたか聞いて置きたいのだが,それは婆さんが知ろう筈がないし ○まるで世間が知らないんだから仕様がない △皆さんの好意を日本国民が知ったときには

これらの動詞は「を」「と」などの助動詞を伴う他の補語をとることがあり、 その前には、動詞の意味の対象となるもの、その内容となるものを示す。対象 となるばあいは人間や人間の行為あるいはそのほかの名詞が来て「を」を用い る。「と」の前は副詞あるいは句などがくる。

次は主格が「は」になっている例。また、表層では直接の主語のない例。「と」の例省略。

○与次郎の声は今日に限って,几帳面である。その代り連<つれ>がある。 三四郎はその連を見たとき,果して日頃の推察通り,青木堂で茶を飲んでいた人が広田さんであるという事を悟った ○三四郎は全く西洋の音楽を知らない。○このなかにはいるものは,現世を知らないから不幸で ○三四郎はボーアという言葉を知らなかった ○君は九州の田舎から出たばかりだから,中央文壇の趨勢を知らないためにそんな吞気なことをいうんだろう。○三四郎は無論原口という連れの名前を知らなかった ○われは我がとがを知る ○それは婆さんが知ろうはずはないし ○馬鹿だなああんな女を思って。思ったって仕方がないよ ○いくら日本の為を思ったって ○先生の為を思ったからです ○けれども,あの位研究好の兄がこの位自分を可愛がってくれるのだから,それを思うと,兄は日本中で一番好い人に違ないと云う結論であった ○真面目にそんな事を考えて森の下を通って行くと,突然その女に逢った ○三四郎はその晩与次郎の性格を考えた ○高く飛ばうと云うには飛べるだけの装置を考えた上でなければ出来ない ○三四郎は未だ曽<かつ>てこの問題を考えたことがなかった。○三四郎は切実に生死の問題を考えたことのない男である ○三四郎はこの間から美弥子を疑っている。

(V3-9t)「比較・選択」などの動詞(2,3061)「選ぶ」など。人間を主とし、人間に関係ある名詞が「が」の前にくる。別に助詞「を」を伴い、比較・選択する対象を指示する。

 $\triangle$ 20・50あなた**が**選ぶ 7 大歌手 (4 例)  $\triangle$  チョコファンに緊急ニュース・明治が選んだパリコレクションがただいま到着しました  $\bigcirc$  それで,僕が何故里見さんの眼を選んだかと云うとね。まあ話すから聞き給え。

はじめの「あなたが選ぶ7大歌手」と「明治が選んだパリ・コレクション」とは,それぞれ連体修飾の関係になっているが,被修飾語の名詞が本来ならば「を」格になるところが condensation を受けたものである。

次の例は「が」のない、あるいは「が」でない例。

- ○これから先はもう一遍寄って、委員を選んで、学長なり、総長なりに、我々の希望を述べに遺るばかりである。○総代を選んで学長のところに行く
- ○僕が何故里見さんの目を選んだかというとね

(V3-10t) 「試験・計量・探求・発見」の動詞「発見する」「みつける」「さがす」「こころみる」「たしかめる」「実験する」「審査する」「検車する」「調べる」「計算する」「目指す」など(2.3062)。人間を主とし、またそれに関係ある名詞が「が」の前にくる。多くの動詞が助詞を「を」伴ない、あるいは condensation をした形でその格の名詞にかかる。

△問題の抗牛物質は、ストマイ発見で有名なアメリカのワックスマン博士が 1940年に発見したアクチノマイシンである △機械工場南側の壁から煙が出 ているのを従業員が見つけた 〈国鉄貨物線小名木川の高架線路に、男の変 死体があるのを小名木川貨物列車の吉田繁治機関土がみつけた <売上金た  $\nu$ 56万3千円が盗まれているのを、出勤した同社員がみつけた  $\wedge$ 28日午前 9 時50分ごろ, 東京世田谷区砧町 363, 城南信用金庫社員, 福島正治さん (34)方の台所で、長男、弘ちゃん(6つ)(玉川幼稚園児)と次男豊ちゃん (4つ)の二人が、半分程水のはいったポリバケツ(直径40センチ、高さ50 センチ) に頭をつっこんで窒息死しているのを, 隣の正治さんの義母, きよ さん(55)見つけた  $\triangle$ バー・ホステス末松勝江さん(22)が死んでいるのを訪 れた友人の同市上町4-22, ホステス滝波はるみさん(22)が見つけ横須賀 署に届け出た △現場から300メートル離れたアパートの増築現場にナイフ をかまえてかくれていた男を同署警ら補植竹巡査(22)が見つけ、とびかか ってナイフをたたき落とし、△埋立地の臨海道路際に若い男がうつぶせにた って死んでいるのを通行人**が**みつけ、船橋署に届け出た ○ニュートン**が**林 檎が引力で落ちるのを発見したりするのは △韓国の子弟が捜している日本 の父 ○おい,野々宮宗八さんが君を捜していた ○わたしが試みるのもそ うしたことなのです ○では一つ訳して見たら好かろうという事になって, 四人が色々に試みたが一向まとまらない △中年の人が一枚ずつ席を確かめ て買っていった ○それに僕が夜実験をやるものですから △この公募には 外人作品を含めた114点が集まり、東北大教授藤田金一郎、建築家菊竹清訓 氏ら17人の専門が家審査した  $\triangle$ したがってラジオ、テレビ局の免許申請が 出されれば、郵政大臣がこれを免許するという今までの免許形態が △車輌 整備員が検車したところ,○僕が一応事情を調べて △同県警特捜班が調べ

た関係者四十人 〇「そうすると,月に5円の割だから一人前1円25億に当る。それを30日割りに付けると4億ばかりだが――いくら田舎でも少し安過ぎるようだな」と野々宮さんが計算を立てた  $\triangle$ 日本航空が目指す世界一周ルート

「こころみる」は「と」をとることもある。

○三四郎はなるべくこの機会を長く引延ばして利用しようと試みた 「が」のない例, 「が」でない例。

○野々宮さんは目録に記号<しるし>を付ける為に、隠袋<かくし>に手を入れて鉛筆を捜した ○帰るとき勝手口で下駄を探していると ○子供は……しきりに泣き号<さけ>んで御婆さんを探している ○その翌日は丁度日曜日なので学校では野々宮君に逢う訳に行かない。然し昨日は自分を探していたことが気になる ○あの投書の出所を探して制裁を加えるの ○広田先牛や野々宮さんはさぞ後で僕等を探したでしょう

(V3-11t)「推源・判断」などの動詞(2.3063)「きめる」「決定する」「決心する」などが主として人間が主格になる。人間の行為が「が」の前にくることもある。きめる対象となるものとなるものは助詞「を」「と」で表現される。

△今度は先手が作戦を決めることになります △八木が畑違いの通信研究に教室のスタッフを動員しようと決心したのは △「恋人たち」映画化を決め、製作にも関係していたへストンがいちはやく彼女の出演を決めたのは △この戦いがナチ・ドイツの運命を決定した

最後の例は、人間の行為のところに分類するのは問題があろう。「が」のない例。

○野々宮は行く事にした。行くときめたに就ては,三四郎に依頼<たのみ> があると云い出した

決定されたものに「に」を用いる。

(V3-12t) 「誤り・訂正」などの動詞(2.307)「あやまる」「失敗する!「ま

ちがうしなど。主として人間が主格になる。

△まさか私が失敗するとは

(V3-13t)「計画」の動詞(2.308)「企てる」「計画する」「企む」「しくむ」など。人間あるいはそれに関係ある名詞が「が」の前にくる別に助詞「を」を伴い,その内容について指示する。そのばあい,人間の行為に関した名詞であることが多い。

△エンクルマ前大統領が計画した総額30億ポンドにのぼる七カ年計画 ○ ただ僕がそうした会を企てたのだ △横浜市当局が25万人都市の計画を立て △ウントン中佐は昨年9月30日いわゆる将軍評議会がスカルノ打倒の陰謀を たくらんでいるとし、○サザーンという人がその話を脚本に仕組んだ 「が」のない例。

自然に背くそむい>た没分暁の事を企てるのとは質が違う

(V3-14t) 「見る」類の動詞 (2.3090) 「見る」「ながめる」「見おろす」「見あげる」「のぞく」「ねらう」など。主体は人間である。見られる対象は助詞「を」伴う名詞によって示される。この名詞は人間であることもあるが,その他、主とじて具体的なものである。

○常識のあるものが見れば、どうしても為にする所があって起稿したものだと判定がつく ○隣の男が僕の鼻を見て赤いと云った ○ただ筋向うに坐った男が、自分の席に帰る三四郎を一寸見た ○すると筋向うにいたさっきの男がまた三四郎を見ていた ○女が三四郎を見た時は ○その一人が三四郎を見て ○人が見ると穴倉のなかで冗談をしている様だが、これでも遭っている当人の頭の中は劇烈に動いてるんですよ ○そうして妹がこの間見た女のような気がしてたまらない ○ぼくらが菊細工を見にゆくとき ○小泉広も世代的には自分より四つ五つ年上といった感じで自分が見てきたものとはそう大差ない ○一人の学生がこの様子を見てにやにや笑い ○教師の方を見ると、教師がちゃんとこっちの方を見ている ○よし先生が見なくってもだれかが話すだろう ○「君あの乞食に銭を遣りましたか」「いいえ」と

三四郎が後を見ると,例の乞食は 〇三四郎がふとその横顔を見ると;〇三四郎が美弥子の顔を見たときには 〇三四郎が見ると,二人の姿が筋違「が」いに見える 〇絵は無論仕上ってはいないのだろう。けれども何処も彼処 〈かしこ〉も万遍なく絵の具が塗ってあるから,素人の三四郎が見ると,中々立派である ○気の小さい三四郎が見ると,心配になる位渡して歩く 〇三四郎が見ると,との画は一体ぱっとしている ○その原口さんがきょう見に来ていらっしゃる ○三四郎がこの名刺をながめている間 △舞台中央に男女の黒人8人がたむろしている。それを二階から仮面(マスク)をつけた 5人の白人が見おろしている ○しかし三四郎が眼を挙げると同時に女は動き出した ○三四郎が覗くや否や隣の男はノートを三四郎の方に出して見せな人敵がねらっているのはこちらではない

次の例は表層構造では「見る」が直接人間を意味するものと結びついてはいないが、もとの形ではやはり結びついているものであろう

○「森の女」の前には開会の当日から人が一杯集った。折角の腰掛は無用の 長物となった。ただ疲れたものが、画を見ない為に休んでいた

「が」のない「が」でない例。例が多いので「ながめる」について例を示す。

- ○三四郎はその上に腰を掛けて、高い崖の下にある池を眺めた ○三四郎は 絵を眺めながら ○高く池の面に枝を伸した木の奥を眺めていた ○病院で は曽てこの女の顔を眺めすぎて赤面させた ○美弥子はまた遠くの雲を眺め 出した ○三四郎は怖くないとも答えずに女の頸の曲り具合を眺めていた
- ○「ええ」と左右を眺めぎりである ○女はややしばらく三四郎を眺めた
- ○三四郎は遠くからこの世界を眺めて不思議に思う ○静に外を眺め出した
- ○美弥子は二重験を細くして高い所を眺めていた ○野々宮君はしばらく池 の水を眺めていた。

(V3-15t) 「見せる」の動詞 (2.3091) 「見せる」「さす」「示す」などの主体は人間であり、「見せる」ものを示す名詞は「を」を伴う。人などを示す名詞は「に」を伴う。

○与次郎が例のヘーゲル論を指して △ソ連首脳がこのように核拡散防止

ならびに軍縮全般に強い熱意を示したのは △招待作家の新世代**が**,新しい 展開を示そうとしていないところにちょっと停滞があり

次の例のようなものは表層構造では直接主格と結びついていないが、もとの形では人間「われわれ」が主体であろう。

△われわれが見せたいと願っている全容

「が」のない例、「が」でない例

- ○すると野々宮君は、……と云って手に持った電報を三四郎に見せた
- ○「これが御殿」と歩きながら左手<ゆんで>の建物をさしてみせる ○女 は雨の中に立って、見廻しながら、向うの森を指した。

(V3-16t) 「聞く」動詞 (2.3092) 「聞く」「聞かせる」など。主体は主として人間である。聞く内容は,助詞「を」を伴う名詞によって指示される。あるいは「と」を伴う句によて $_{0}$ 示される。人を示す名詞に「に」がつき,動作の相手を示す。

△平賀東吉以外のだれもが、こうしたニュースをまじめには聞かなかった
○ええ、私が母の云う事を聞いて…… ○現に自分がその話をそばで聞いて
いて ○第一僕のため運動をするものがさ、ぼくの意向も聞かないで、勝手
な方法を講じたり ○「妙な御客が落ち合ったな。入口で逢ったのか」と野
々宮さんが妹に聞いている ○「ええ、少し用があるんです。あなたは遊び
ですか」「いいえ、私も御用なの」両方が同じ様な事を聞いて、同じ様な答
を得た ○馬が云う事を聞かないで、意地悪くわざと木の下を通るので △
大学者アインシュタインが、かれに、ごじまんのチェロで一曲聞かせた時だ
「聞く」の前の「を」は "entendre" の意味のとき「梗概」「講義」「講釈」
「…のいうこと」「ことば」「講義」「はなし」「批評」など言語関係の名詞
がくることが多い。"poser des questions"の意味のときは「生活状態をきい
てみる」「名前をきく」など(「三四郎」で)。

(V3-17t) 「かぐ・味わう」の動詞 (2.3093) 「かぐ」など。主体は人間。次の例は表層構造では直接人関と結びついているとはいえないかもしれないが、

本来は動作の主体は人間である。

○若い方**が**今までかいでいた白い花を三四郎の前に落して 「が」のない例

○暖かい汁の香を嗅いでいる時,又故郷の母からの書信に接した。○久し振りで故里の香を嗅いだ様でうれしかった ○三四郎は羨ましくなった。奥まで行って二階に上って,それから三階に行って本郷より高い所で,生きたものを近付けずに、紙の臭を嗅ぎながら読んでみたい

一般に「香」「におい」などが「を」の前にくるが、次のようなばあいもある。 ○女は紙包を懐に入れた。その手を吾妻コートから出したとき白い手帛<ハ ンケチ>を持っていた。自分の所へ宛てて三四郎を見ている。手帛を嗅ぐ様 子である。○三四郎は左右の生垣を眺めながら、生れて始めて東京の秋を嗅 ぎつつ遣って来た。○左の手に白い小さな花を持って、それを嗅ぎながら来 る。

このようなばあいはあるいは漱石の文脈的な要素も強いかもしれない。

(V3-18t)「呼ぶ」動詞(2.310)「呼ぶ」「称する」「提唱する」「となる」 「声をかける」「呼びかける」「歌う」など。人間あるいは人間に関係した名詞が「が」の前にくる。その対象や内容を助詞「を」「と」で示す。

△担任の高木良子先生が「徳仁親王殿下」と呼ぶと △米国が日本を軍事基地と称している △あえて再びやろうと永田社長が提唱しているのは △ドイツのシュレーゲルが唱え出したことばで △韓国が提唱するアジア外相会議 ○「早いな」とまず与次郎が声をかけた ○どこから来たか与次郎が突然声をかけた ○すると隣にいた与次郎が声をかけた △高田信夫らが歌う

次の例は主格が「は」によって示される。

△これで米政府は同提案の線に沿って日本が積極的にこの問題で働きかけることを呼びかけたことになる

「呼ぶ」は「客を呼ぶ」「下女を呼ぶ」「『おい』と人を呼ぶ」など,人を意味する名詞に「を」を添える。「となえる」は、「ばんざいをとなえる」「ド

イツのシュレーゲルがとなえ出したことば」などことばに関連した名詞をともなう。

(V3-19t) 「表現・報告」の動詞(2.312) 「言う」「しゃべる」「言い出す」「主張する」「述べる」「どなる」「叫ぶ」「言明する」「発表する」「評する」「知らせる」「報告する」「急報する」「伝える」「通信する」「翻訳する」など。主として人間が主体。人間関係の名詞が「が」の前にくることもある。言う内容は主として助詞「と」を伴う句となって現われるが,「何かいう」「礼をいう」「そんなことをいう」のような形になることもあり,助詞「を」などが用いられる。伝える相手は助詞「に」を伴う,人間あるいはその関係の名詞で指示される。

○僕がその女に、あなたは少しも変らないと云うと ○いくら僕が云って も聞かない ○ええ,妹がこの間から病気をして,大学の病院に這入ってい るんですが、其奴<そいつ>がすぐ来てくれと云うんです <スタッフの一 人が「放送の日は見てくださいね」といえば △日系人兄弟三人が「ぼくら はコムニスタ」といって、○すると女房がそれじゃ御前さん眠り薬でも嗅が されたんだろうと云ったら角三が ○細君**が**私が家に居っても、貴方が出て 御什舞になれば、後が困るんじゃありませんかと云うと、○婆さんが小さな 声で、与次郎さんは昨日から御帰りなさらないと云う △「心配していた」と こどもがいうようなもので ○次にその男がこんなことを言い出した ○す ると男が、こう云った ○汽車で水蜜桃をくれた男が、危ない危ない、気を 付けないと危ない、と云った ○「ヘリオトロープ」と女が静かに云った 〇その時僕**が**女に,あなたは画だというと,女**が**僕に,あなたは誰だと云っ た 〇「三十円」と女が金高を云った 〇然るに女が, 「御金は」と云った  $\bigcap$ 「石の門はいかん」と先生が云う $\bigcap$ 「そうかな」と先生が云った $\bigcap$ だ けどね、化学の先生がいったんじゃない ○「誰にだって分らんさ」と今度 は先生が云った○「あの人は大変賑やかな人ですね」と三四郎の隣の金縁 眼鏡を掛けた学生が云った ○「これは椎」と看護婦が云った ○下女が御 飯と云うのを ○暫くすると幹事が大きな声で,みんなに席へつけと云う

○三四郎はハムレットがもう少し日本人じみたことを云ってくれればいいと いの」というと △一部の西欧人がいうように ○「菊人形はいいよ」と今 度は広田先生が云い出した。○「何で、あんな立派な家を見るのだしと広田 さんが云う ○……もう少し待ってくれ給え」と広田先生が云うのを ○や っぱり責任をのがれるんだ | と広田が言う 〇罪がなくって愉快だ | と広田 先生が云った ○「いえ場所が悪いからだ」と今度は広田先生が云った ○ 「佐々木に買って貰う積りだそうだ」と広田先生が云った ○「あの女は落 ち付いていて、乱暴だ | と広田先生が云った ○「まだのびるかもしれない | と広田先生が三四郎に云った ○広田先生がこんなことを云う ○「高飛び よ」とよし子が云う ○「交番まで送ってやるわ」とよし子が云う ○あな たはとよし子が云う 〇三四郎が聞いて見ると、よし子が病院の看護婦の所 へ, 序だから一寸礼に行ってくるんだと云う ○あがってみましょうかしと よし子が快く云う ○やる気にならないわね | とよし子がすぐに云った ○ 「あんな所に」とよし子が云い出した ○「背が高いのね」と美弥子があと から云った。○飛んでごらんなさい」と美弥子**が**云う ○「あなた,いらっ して | と美弥子が云う ○随分ね | と美弥子が云う ○お集めになりました ね と美弥子が云う ○空の色がにどりました | と美弥子が云った ○これ をどうするの」と美弥子**が**云ったとき ○「お気の毒さま」と美弥子**が**云っ た ○やがて美弥子**が**云った。○「ストレイシープ」と美弥子**が**口の内で云 った 〇美弥子がこれはどうですかというと 〇先生もいらっしゃい」と美 弥子が最後に云う ○「一寸御覧なさい」と美弥子が小さな声で云う ○「え え一寸 | と美弥子が小さな声で云う ○「私?」と美弥子がまた云った ○ 御蔭様で | と美弥子が礼を述べた 〇上から美弥子が, 「其処まで御一所に 出ましょう。可いでしょう。」と云った ○雨の音の中で美弥子**が**,「さっき の御金御覧なさい | と云った。○あらと云って挨拶をした後で美弥子**が**, 「先 達ては有難う | と礼を述べた ○よし子が「じゃ行って来てよ」と云うと、 美弥子が、「御早く……」と云っている ○現に里見が僕に、君がやるなら やってもいいと云った ○あった,あった」と三四郎**が**云う ○ 「日本にも ありそうな句ですな」と今度は三四郎が云った ○暫くしてから、今度は三 四郎が云った ○「美しい空だ」と三四郎が云った ○「なかなかうまい」 と三四郎が絵をながめながら云う ○三四郎がこれだと云う ○三四郎が何 か云おうとすると ○「何ですか」とバケツを提げた三四郎が梯子段の下か ら云う ○三四郎が小さな声で「ちとダーター、ファブラを遣らないか」と 云うと ○やがて、三四郎が「困るなあ」と云った ○三四郎が「ええ」と 云う ○大きなものを描いたなあ」と与次郎が云った ○「あとの整理は明 目だ | と与次郎が云った ○「女は恐ろしいものだよ | と与次郎が云った ○「野々宮さんならなれる」と与次郎が云った ○「その金を失したんだか ら済まない」と与次郎が云っている ○「そういうこともあるからなあ」と 与次郎が云った ○「電車に乗るがいい」と与次郎が云った ○「先生は何 でも読まないものを読む癖がある」と与次郎が云った ○すると与次郎が云 った。「実は今日君に用があると云ったのはね……○「へえ, 伺って置きま す」と与次郎が几帳面に云う ○すると突然与次郎がこう云った「イブセン の人物に似ているのは里見のお嬢さんばかりじゃない…… ○後で借りて行 って緩くり読むがいい」と与次郎**が**小言を云う ○「まだ片付きませんよ」 と与次郎が早速云う ○あとで与次郎が三四郎にこう云った。「あれだから 偉大な闇暗だ… ○ひとり与次郎が時々石の門の事を云う ○与次郎が広田 先生を誘って行けと云う ○それを与次郎が、勿体ないから是非着ろと云う ○野々宮さんが改めてこう云った。「何して御母さんの方ではね…… ○「 やっぱり場所が悪いんだ | と野々宮が云った ○「御苦労さま | と野々宮さ んが云った ○それからあとは自然派でしょう | と野々宮さんが云った ○ 「なに空中飛行器の事です」と野々宮さんが無造作に云った ○背を向けな がら原口さんがこう云った ○原口さんがこんな事を云う。「やっぱり一中 節を稽古している ○すると原口が例の調子で, 「罪がない代りに, 大変計 算が面倒になって来た。やっぱり一利一害だ」と云った ○ただ原口さん**が** しきりに件の銅像の悪口を云っていた △やがて第一次世界大戦が終わって はじめて映画史**が**いうところの第二次アヴァンギャルドが生まれたのである △この人がしゃべると○すると広田先生が、「そんな図はそう面白い事もな

いじゃないかしと無遠慮な事を示い出した 〇そこで今度は三四郎の方が。 はあ、はあと云い出した ○暫くすると美弥子が、「野々宮さんは、理学者 だから、なおそんな事を仰しゃるんでしょう」と云い出した 〇与次郎の隣 にいたものが、「ダーターファブラの為に祝盃を挙げましょう」と云い出し た ○各自が自分の存在を主張しようとして ○「御蔭様で」と今度は原口 さんが礼を述べた ○縁側まで見送って三四郎が礼を述べた時は ○御母< いいころだが | 真吾が例によって軽口を聞く △死体が歩む! 死者が叫ぶ! ヘチャップリン監督が「うるさい!」とどなる △エンクルマが「いつかは 政権を取りもどしてみせる | と決意を言明した | <外務省が発表した日米安 保の問題点 △同筋はさらにこの漁船員らの釈放時期,場所,方法などにつ いては26日韓国政府が正式に発表するだろうとかたった ○すると与次郎が 等弥子をイプセン流と評したのもなるほどと思い当たる ○母が宿所を知ら せてこないから △最初、朝永会長が1月に開かれた臨時総会以後の経過を 報告したが △24日の閣議で,三木通産相が報告した「1966年通商」を了承 した < ト岐さんが有線放送で平塚署金田駐在署に急報した < タス通信が 伝えるところによると △ベルリンの米軍放送がやはり内容を伝えたという ヘニューヨーク14日共同が14日伝えたハリス世論調査の結果 △ニューヨー クタイムスが伝えたチャウシェスク・ルーマニア共産党書記長の反ソ演説 ○今僕**が**翻訳をして先生に叱られたところです

以上のうち、「映画史がいう」という例は、例外とすべきであろう。ただ例数で示されたように、数が少ない。

「いう」は「こごとをいう」「冗談をいう」「……ことをいう」など,「のべる」は「礼を述べる」「口上をのべる」などと使われ,前にくる名詞に言語関係の名詞がくることがある。「本当をいうと」「希望をのべる」などの例では「本当のこと,状態」,「希望すること,内容」などの意味に,名詞がなっている。

(V3-20t) 「書く」動詞 (2.3150)。「書く」「しるす」など。主体は人間で、

書くものを示す名詞は助詞「を」を伴う。

○俺が書いたんだ」と云う ○新聞には君が書いたとしてあるが, ○実際は 佐々木が書いたんだってね ○先生の崇拝者が書いたものです ○里見さん を描いちゃ, 誰が描いたって, 間が抜けてみる様には描けませんよ 次の例は文脈的に、その文の範囲内では主格が省かれている。

○三四郎はその時 answer と云う字はアングロ・サクソン語の and-swaru から出たんだと云う事を減えた。それからスコットの通った小学校の村の名を覚えた。いずれとも大切に筆記帳に記して置いた

「を」の前の名詞は「手紙をかく」「絵をかく」「ポンチ絵をかく」など形式 に関する名詞(1.3)。「女を描く」など対象(1.2, 1.4, 1.5) など)に関する名詞のこともある。

(3V-21t) 「読む」動詞 (2.3151)。「読む」など、人間が主体。

○しかし何を書いているんだか、他の者が読んでも些<ちっ>とも分らない「が」のない例、「が」でない例。

○余今試との為め、即ちパンの為めに、恨を呑み涙を呑んでこの書を読む。

○なるほど本で読むとそうらしい ○先生は何でも人の読まないものを読むくせがある。○三四郎は勉強家というより寧ろ低回家なので割合書物を読まない。○その字が,野々宮さんの隠袋<ポケット>から半分食み出していた封筒の上書きに似ているので,三四郎は何遍も読み直してみた ○アフラベーンなら僕も読んだ ○君ラスキンを読みましたか。

読む対象は「本」や「手紙」など書かれたもので、助詞「を」を伴う。

(V3-23t) 「労働」の動詞 (2.332), 「つとめる」「かせぐ」「休む」「休める」「怠る」「働く」など。人間が主体。人間関係の名詞のこともある。

△川上参事官が当分同部屋代理を勤めることになった △39年度もE商店 が1740万円のたばこ税をかせぐはずだった ○その六十人が仕事を休んで ○色の白い品のいい学生が,しばらくナイフの手を休めて △技術陣が常に 反省を怠らず

「が」のない例「が」でない例。

○三四郎は元来あまり運動好きでない。……高等学校のボート競漕のときに 旗振の役をつとめたことがある。○今日は学校を休む。

(V3-24t) 生活, 衣食住の動詞 (2.333)。「食う」「食べる」「飲む」「着る」「はく」など。主体は人間。

○今日は伊太利人がマカロニを如何にして食うかと云う講義を聞いた ○ 近頃学校の先生が昼の弁当にそばを食う ○何でも三十円あると、四人の家族が半年食ってゆけると書いてあった ○第一僕がいなけりゃ三度の飯さえ食えない人なんだ ○二人が水蜜桃を食べているうち ○なんだか君の方が飲んでみたいようだぞ ○縁側には主人が洋服を着て腰をかけて ○里見さん。あなたが単衣〈ひとえもの〉を着てくれないものだから、着物が描き悪〈にく〉くって困る。○三四郎が着なければ、自分が持って行って着そうな勢で ○一番に到着したものが、紫の猿又をはいて

「焼け出される」は通常受身形で使うので、ここで扱った。「食う」の前には「食べものを意味する名詞」「助詞を」が来、「着る」「はく」の前には「衣服に関係ある名詞」「助詞を」が来、「着る」の前の名詞は三四郎では「外套」「絹」「着物」「コート」「制服」「背広」「羽織」「単衣ひとえもの」「フロック」「まわし」洋服」であり、「はく」は「ぞうり」などがある(名詞、助詞「を」動詞が直接連続しているばあい)。

(V3-25t) 演劇などで使う動詞,「演ずる」など。人間が主体。「演ずる」の 前には人間関係の名詞に助詞「を」がついた補語がくる。

△今度はL・ターナーががヒロインを演じ,

(V3-28t)「全身的動作」の動詞(2.3390)。「とらえる」

○三四郎はこの瞬間をとらえた △向井弘之 (27) をおどし未遂でとらえた △人間的な成長をとらえ、これを画面に出して行きたい △森ディレクターは「何のために彼らは死んだのか、戦争と軍隊の制度のもたらした悲劇とし

「を」の前は人や動詞などのほか,各種の用語(時間,変化,行動など)がくる。

(V3-30t) 「手の動作」の動詞(2.3393), 「つまむ」「いだく」「くる」「握る」「とる」など人間が主体になる。

○与次郎が箸で皿のものをつまんで △大人達が抱いている深い倦怠感 △ 一人の係官が手作業でカードを操れば2週間はかかる △オートボルタで3 日,軍が支配権をにぎった △日本の他の諸国がベトナムの平和解決に主導 権をとることを歓迎する

これらの動詞は助詞「を」を伴う名詞と結合することが多い。「が」のない例 ・「が」でない例を追加する。

○一番先へ来て、世話を焼いたり、愛嬌をふりまいたり、仏蘭西式のひげをつまんでみたり ○三四郎はよし子に対する敬愛の念をいだいて帰った「をとる」の前の名詞には「下足、席、床、ナイフ、羽織、筆、座ぶとん、帽子、金」など具体的なもの(主として1.4)、「気嫌、姿勢、調子、年」など人間の行為の名詞があり(1.4、1.1)、イディオマティクないい方のもある(例は「三四郎」)。

(V3-31t)「行為」の動詞 (2.342),「行う」「する」「やる」など。条件によっては「加える(行為を)」など。人間が主体で人間関係の名詞が「が」の前にくる。多くのばあい助詞「を」を伴う名詞を伴う。「する」などには,慣用的な言い方も多い。

△安藤孝子が,このほど始めてレコード吹き込みを行なった △ベトナムでは英雄的な行為も住人が同じことをやれば英雄でなくなるそうです ○現に里見が僕に,君が遣るなら遣っても好いと云った位だもの,あれで馬鹿囃には八通り囃かたがあるんだそうだ △今のところ選んだ人がよくやってくれるので △だからわれわれ政治家が先頭切って市場開拓をやろうというの

だ 〇先生が書物だけ早く片付けようというので、三人が又根気に遣り始めた 〇五十余りの婦人が三四郎に挨拶をした 〇三四郎がむずかしい顔をして腰かけている 〇下劣の極だ」と先生が忽ち苦い顔をした 〇じゃ、ある状況の下に、ある人間が、どんな所作をしても自然だということになりますね 〇その時三四郎がまじめな顔をして ○柔術の男が真面目な顔をして云った ○考えのあるものが知らん顔をしていられるものか ○僕が学校で教師をしているとき △彼らが南ベトナム人に加えている暴力 △政府が公務員制度審議会に弾圧を加え

「をしの前の名詞の例。人間の行為に関するものがほとんどである。

○偽善を行なうに露悪をもってする ○これから採点でも行なおうとするまぎわ ○文芸家の会をやる ○教授会をやる ○学問をやる ○わざわざ偽善をやる ○なぜそんな愚なことをやるか ○実験をやる ○茶をやるという女 ○著作をやる ○あいさつをする ○意見をする ○運動をする ○ 近いうちに会する ○研究をする ○下宿をする ○講釈をする ○答をする ○ねえさんじみたことをする ○ゆうべのおさらいをする ○こどものような所作をする ○掃除をする ○つりをする ○そんな手数をするならば ○なんぎをする ○うんとのびをする ○どんな働きをするか ○はなしをする ○筆記をする ○ひっこしをする ○昼寝をする ○返事をする ○弁解をする ○メッキをする ○旅行をする ○礼をする

(V3-33t) 「交わり・応接」の動詞 (2.350~1) 「あう」「待つ」「招く」「迎える」「訪ねる」「訪れる」「見舞う」など。人間が主体であるが,他のものが「が」の前にくることもある。後者のばあい,多くは動詞の意味が本来のものから,ひゆ的に,他に転用されたとみるべきばあいが多い。

△高彦氏と岡氏が軽井沢であったとき ○そうしてその妹はすなわち三四郎が池の端であった女で △たまたま担当者が三味線の豊藤にあって △ベテランの係員がご質問, ご相談をお待ちいたしております △すごい馬が待っている ○あのときの看護婦ですか, あなたが今訪ねようと云ったのは ○病気だと云うから, 三四郎が見舞に来た ○三四郎が案内をした

「あう」は「と」「に」を伴う名詞(人間関係),「まつ」は人間その他の名詞に「を」がついたもの,「たずねる」(場所,建物,人)「を」などと結びつく。

次のような使用は, 主体が人でない例である。

 $\triangle$ 一方磐梯吾妻スカイラインは37年開通以来,50万台以上の車 $\emph{m}$ おとずれて全国に知られている  $\triangle$ 交通対策の不備 $\emph{m}$ 滞貨を招いた  $\triangle 16$ 局のヒットナンバー $\emph{m}$ あなたを夢の世界にさそい  $\triangle$ 予算案 $\emph{m}$ 大詰をむかえ

「が」のない例。

○休暇中だから理科大学を尋ねても野々宮君は居るまいと思ったが ○野々宮を尋ねて来た訳でもない。尋ねない訳でもない ○美弥子はこの夏自分の親戚が入院していた時近付きになった看護婦を訪ねれば訪ねるのだが,これは必要でも何でもないのだそうだ ○三四郎は母の云い付け通り野々宮宗八を尋ねることにした ○この女にあうと重苦しいところが少しもなく学校では野々宮君にあうわけにはいかない ○故郷へ帰ってこどもに会うのはうれしい ○病院の前も何遍となく往復したが普通の人間に逢うばかりである ○それから美弥子に逢う機会は今日までなかった ○その代りある掬すべき情景に逢うと ○一言でも先方の意を迎えるようなことを云えば急に卑しくなる ○三四郎は自分で医者をむかえたおぼえがない ○美しい妻君を迎えて ○美弥子を迎えに来て ○よし子を見舞いにくるようにしてやるから次の例は人間が主語ではないが,西洋風な表現で一種の文体効果も感じられる。

○演芸会はこの間に在って長閑のどかなるものと,春と暮の差別を知らぬも のとを迎えた

(V3-34t) 「約束・交渉」の動詞 (2.352),「承知する」「受け入れる」「拒絶する」「依頼する」「引きうける」「異を立てる」「取りさげる」など。主体は人間。

〇ところが妻君が承知をしないで  $\triangle$ もし政府ががわれわれの要求を受け入れないで  $\bigcirc$  「よくってよ」と妹が拒絶した  $\bigcirc$  「先生,二階へは是非佐々

本を置いてやって下さい」と与次郎自身が依頼した △北ベトナム側が話し 合いに応ずる ○それで美弥子さんが引き受けてくれて △中味は「和光堂 」がお引き受けします ○与次郎が異を立てた △直ちに対決政策をインド ネシア側が取りさげるかどうか

ほかに助詞「を」, 語によって「と」を受けることが多い。「を」に動詞の対象となる人間の行為を, 「と」は引用の内容を受ける。

「が」のない例、「が」でない例。

○ところがこの夏高等学校の受験生の答案調を引き受けた時の手当が六十円 この頃になってようやく受けとれた。○三四郎は承知した ○でも兄は承知 しているんですもの

(V3-35t) 「競走・攻防・勝敗」の動詞 (2.353), 「攻める」「おそう」「守る」「克服する」など。人間が主体である。 (ひゆ的な例外がある)

△先生が飛と銀で攻めてくるなら △しかし両国が原則を守りつつ,手を打つ余地はある △全員が団体行動を守りつつ

以上のうち「原則を守る」「団体行動を守る」などは、意味が転化して本来の 2.353 のら行外に出ているものとすべきであろう。次の例は主体が人間以外の 例。

○たちまち強烈な個性的の刺激が三四郎の心を襲って ○大きな百日紅<さるすべり>がある。然しこれは根が隣にあるので、幹の半分以上が横に杉垣から、此方<こっち>の領分を冒しているだけである。

助詞「を」をとるもの、「攻める」「おそう」「守る」「克服する」など。

(V3-36t)「人事」の動詞(2.363),「遣わす」など。人間が主体。 へ日本政府が派遣した特使

「遣わす」「派遣する」などの動詞は「を」をとる。名詞に人または物。

(V3-37t) 「教育・救護」の動詞 (2.364~5), 「教える」「指導する」「注意する」「助ける」など。人間が主体。

△8月15日から2週間、日光の金谷ホテルで開かれ、トリオ、カルテットなどのアンサンブルを中心に、アメリカのジュリヤード音楽院のアール・カーリス、ロバート・マン(以上バイオリン)、ラファエル・ヒリヤー、ビオラ・クラウス・アダム(チェロ)の諸教授が指導することになっている。○与次郎が仏蘭西の画工〈アーチスト〉はみんなああ云う襟飾を着けるものだと教えてくれた ○「それじゃ里見さんの所に限る」と与次郎が、また注意を与えた ○「先刻〈さっき〉の話をしなくちゃ」と兄が注意した ○連れて行くがいい」と兄が注意した ○みんなを写生しているから、私達も用心しないと、ポンチに画かれるからって、野々宮さんがわざわざ注意して下さったんです △土佐が旧幕府を助ければ ○自分が今日まで養成した徳義上の観念を

「教える」「注意する」のばあい,人間を意味する名詞に「に」がつき(「三四郎に教え」「与次郎に教えて」,「一応与次郎に注意したときに」,「助ける」「指導する」のばあい,人間を意味する名詞に「を」がつく。これらの内容の指示や引用には「と」が用いられる。教えるなどの内容に「を」を用いることもある「こどもにものを教える」,「学校でただ語学を教えるだけ」「野々宮さんから聞いた通りを教える」)。

次の例は動詞の用法がひゆ的。

○然も真似るという自覚が、既に実行の勇気をくじいた上、もう入る席は、いくら詰めても、むずかしかろうという遠慮が手伝って、三四郎の尻は依然として、故の席を去りえなかった

(V3-38t) 「請求・命令・制約」の動詞 (2.366~7), 「すすめる」 「指図する」 「命じる」 「求める」 「要求する」 「束縛する」 「委任する」 など。 主体は主として人間。

○ぼくが原口さんを勧めて、万事原口さんが周斡するように拵えたの ○あの晩、原口さんが、先生に文芸家の会をやるから出ろと勧めていたろう △宮子が指図するわけにはいかない ○与次郎が勧めるので、三四郎はとうとう精養軒の会へ出た ○何でも、僕が下女に命じて、先生の気に入るように

始末を付るんだが △労音が入国許可を代理申請している △社会党が理事会開催を要求 ○第三の世界は燦として春の如く盪<くうご>いている電灯がある。銀匙がある。歓声がある。笑語がある。泡立つ三鞭の盃があるそうして凡ての上に冠として美しい女性がある……。それにも拘らず,円満の発達を冀<といねが>うべき筈のとの世界が却って自らを束縛して,自分が自由に出入すべき通路を塞いでいる ○そとで二人が全然翻訳権を与次郎に委任することにした

これらの動詞の多くは人を表わす名詞と助詞「に」請求命令などの目的となる 容をもつ名詞(主として人間の行為)と助詞「を」を伴なって用いられる。

○この単純な少女は唯自分の思う通りを三四郎に云うが、三四郎から毫も返事を求めていない様に思われる ○その云い方が三四郎に許諾を求めるように聞きたので ○ひどいでしょう」と同意を求めるように云った

(V3-39t) 「待遇 | の動詞 (2.3680) 「あしらう | など。人間が主体。

○三四郎の言葉は段々短くなる。与次郎が好加減にあしらっているうちに、 すうすう寝てしまった。○与次郎は来る人を補まえてきっと何とか話しをす る。悉く旧知のようにあしらっている

(V3-41t) 「所有・取得」の動詞(2.370),「もつ」「うけもつ」「占める」「取る」「得る」「まきあげる」「盗む」「積み立てる」など。これらの動詞は用法が複雑で、イデイオマティックな言い方のものも多い。しかし全体としては主として人間が主体ということができる。「しめる」については「トップを占める」「ウエートをしめる」などの言い方があるのが、この表現全体からすれば、抽象的な関係の方に入れるべきであろう。

○与次郎が入学願書を持って事務へ来たときに ○三四郎が着なければ自分が持っていって着そうな勢いであったから △駐在署へ若い男が短刀を持って押し入り、○その向う側に大きな男がステッキを持って立っている ○美弥子がハタキと箒を持って二階に上った ○腰に斧を指した男が、瓢簞を持

って、滝壺の側に跼<かが>んでいる △若い落語家が力を持ってきたこと
○ところがその女が林檎<りんご>を持って停車場ステーションまで送り
に行くと ○僕が6号活字を受け持っている △米国が戦いを続ける意志に
欠ける △保育の単位を男子学生がとるのは珍しいことではない △兵隊が
銃をとって小屋を飛び出す △自由と進歩の連隊が勝利を得るのだ △コートジボアールの外交筋が得た未確認情報によると △北村が国電巣鴨、大塚
駅周辺で……三万円をまきあげていた △沖縄住民が終戦前に積み立てた郵

これらの動詞はその「所有・取得」の対象となるもの(多くは具体物なのも) を表現する名詞に助詞「を」を添えた補語をとることが多い。 「欠ける」は 「に」をとる。

「勝利を収める」というようなイディオムでも、主体は人間である。

△日本が勝利を収めるまで △学生委員選挙で共産党が勝利を収め

「を」の前の名詞の例(「三四郎」)。「もつ」は印象(をもったまま),うちわ (をもった女), ほうき, 花ステッキ, ハンケチ, びん, 茶器, 茶 (をもって出る)酒, りんご, (手に)網針, インキつぼ, 書物, 帳面, ノート, 宿帳, パレット, 願書, 切符, 家,うち,妻君, (そう)いう母(をもった子), 印象, 興味, 心持,同情, 野心,運命,事情,態度」など。「しめる」は「座,席」など。「得る」は「味方,答, (その)意(をえない),快感,機会,結果,利益,許諾,要領」など。

(V3-42t) 「支払・消費」の動詞 (2.371) 「支払う」「払う」など。人間が主体。通常「代金」「勘定」などの名詞に「を」がついた補語などを伴う。ただし次の例では topicalizaion を受けて、「は」になっている。

△旧館の電気代は昨年6月以降も学徒援護会が支払ってきたが ○勘定は与 次郎が支払った

(V3-44t) 「取引・売買」の動詞 (2.376), 「買う」「買いあげる」「売る」など。人間が主体。売買などの対象となる名詞を「を」で受ける(土地などを

#### 除けば主としての名詞)

○野々宮さんが、妹にヴァイオリンを買ってやらなくてはならないとか ○僕がわざわざ先生に土産を買ってきたんだ ○野々宮君が何を買っている のかしらと不審を起こして ○たしかに野々宮君が兼安で買ったものと同じ ○誰が買ったの ○佐々木が買ったのです △鳥居らが時計を買いにきた ○僕が馬券を買ったんじゃありません ○佐々木が馬券を買って △並びが 丘を国が買い上げ ○与次郎が切符を売るところを △タイムス社が日本で 百科全書を売った方法

「を」の名の名詞の例。

詞。

○それからこの襯衣<シャツ>もこの女の金で買うんだなと考えた。○縁日にひやかしになど行くと急に思い出した様に先生松を一鉢買いなさいなんて妙な事を云う。○そのかわり縁日にものを買う事なんぞは上手でね ○切符を売って ○馬を売る ○油を売る ○哲学を売るの意なし「買う」は「を」「で」,「売る」は「に」などもとる。人,機関その他の名

(V3-45t) 「授受」の動詞 (2.377), 「くれる」「おくる」「やる」「いただく」「受ける」「受けとる」「もらう」など。主体は人間。主として具体的なもの,物品などを意味する名詞に「を」のついた補語がつくことが多い。

○原口さんが招待券をくれたんです ○新蔵が蜂蜜をくれたから ○三輪田のお光さんが鮎をくれたけれども △丸の内署員が家族へ送る身のまわり品△この発明を米英がそっくりいただいた ○自分が野々宮に対する程な尊敬を美弥子から受け得ないのは △増淵が度々脅迫を受けている ○その内袴をつけた男が入場券を受け取った △わたしたちが彼の「無給の残し屋」「椅子」「犀」などからショックを受けるとしたら △現バーンス知事ケネディ派の指示を受け ○それを与次郎が受けとって ○美弥子がこれを受け取るときに ○今度は三四郎の方が香水の相談を受けた ○けれども御光さんがそれを貰って

次の例は「影響を与える」という言い方が人間以外を主体としている例。

△国際経済の動向が日本経済に大きな影響を与えてきている ○自然が毫も 人格上の感化を与えない

「を」の前が人間の例。

○うちの娘をもらってくれないか ○きみいっそよし子さんをもらわないか 人間などを意味する名詞に「に」がついた補語もとる。「くれる」「おくる」の ばあいは授受行為の行なわれる先を示し(したがって「へ」と交替),「いただく」「もらう」のばあいは授受行為の出発点を示す(したがって「から」と交替)。

○女は籃を縁の上に置いて、帯から一枚の名刺を出して三四郎にくれた ○ 月にたった五十円しか大学からもらっていない ○この雑誌を一部君にやる

(V3-46t) 「貸借」関係の動詞 (2.378), 「預ける」「貸す」「借りる」「返す」など。人間が主体。貸借の対象となる(金品等)に「を」がつく。

△ピストルはわたしが北尾さんに預けたもの ○三四郎が与次郎に金を貸したてんまつ ○去年広田先生がこの前の家を借りる時分 ○己〈おれ〉が金を返さなければこそ君が美弥子さんから金を借りる事が出来たんだろう ○あすこへ四十円の貸家を立てて,全体誰が借りるだろうなどと余計なことまでいう。○野々宮君のような新式な学者が物好きにこんな家を借りて ○実は与次郎が到底返しそうもないから,三四郎は思い切って,この間国元へ三十円の不足を請求した ○広田先生が返さないからである。

人間関係の名詞に「に」のついた補語をとる。「預ける」「貸す」「返す」の ばあいはこの行為の行先(したがって「へ」と交替),「借りる」のばあいは 出発点(したがって「から」と交替)を示す

○妻を国許へあずけた○ 君に貸しておく方がいい ○君たしか佐々木に貸したんですね ○おれだって金のある時は度々人に貸したことがある ○学 資を友達に貸した ○自分はこれを美弥子に返しに行く ○あなたから借り ちゃよくないからです

(V3-48t) 「工業」の動詞 (2.382) 「たてる」「きずく」など。人間が主体。

「石塔、銅像」その他家など対象となる名詞に「を」がつく。「基礎をきずく」 など、全体が意味的に転化しても用いられる。

○平太郎が親爺の石塔を建てたから △ジャン・ルーシュが基礎をきづいたちの

(V3-49t)「運転, 医療・興行」などの動詞 (2.383), 「演奏する」など。 人間が主体。

△三つのパンドが演奏する

「運ぶ」「送る」などの動詞もここにはいる。

○この女は素直な足を前に運ぶ ○国から送ってきたばかりの為替 ○月々のものをちゃんちゃんと送ってきたからよかったが ○三四郎はこの時自分も何か買って、鮎の御礼に三輪田の御光さんに送ってやろうかと考えた ○三四郎は丁寧な礼状を美弥子に送った。○金は野々宮さんの方に送ったから ○親から月々学資を送ってもらう身分 ○原口さんは招待券を送ったといっている ○活きた世の中と関係のない生涯を送ってみようかしらん ○結構なものを送ってくださったから ○三四郎はつまらんものを送ったと思った ○改札場まで送ってきた女 ○美弥子は玄関まで送ってきた ○交番まで送ってやる ○妹を送って里見までつれていってやる。

「運ぶ」「送る」は、物品などを意味する名詞に「を」のついた補語、場所(または人)を意味する名詞に「に」のついた補語をとる。

(V3-50t) 「裁縫・炊事・洗濯・掃除」などの動詞(2.384),「縫う」「織る」 「洗う」「拭く」「掃く」など。人間が主体。

○この羽織は、三輪田のお光さんの御母<おっか>さんが織ってくれた 紋付に染めて、お光さんが縫いあげたものだと ○川上で百姓が大根を洗っていたのを ○じいさんが汗をふいて ○美弥子が掃くあとを三四郎が雑巾をかける

#### 補語の例。

○お光さんに縫ってもらった綿入 ○顔を洗う ○手を洗う ○黒い所を洗

う ○茶碗を洗う ○顔をふいている ○そこそこに体をふいて ○手をふいて ○手をふきながら ○眼鏡をふき直して

(V3-51t) 「練り・塗り・射すその他」(2.3851) 関係の動詞, 「つける」「ぬる」「ぬりたくる」など。主体は人間。

○背景の境のところをぬりはじめた。△演じている俳優がみなぬりたくっているので ○飾りをつける

次の例は動詞の,一種のイディオムのなかで用いられている。

○妹がただをこねて ○今に巡査が始末をつける △わたしひとりがああい う結末をつけることに

次の例は動詞がひゆ的。

△こうしたこまかい注意が、よりボーリングにみがきをかけてくれる

(V3-52t) 「扱い・使用」の動詞(2.3852), 「用いる」「使う」など。人間が 主体。対象となるものに「を」を使う(物品・用具言語関係の語など)。

○しかし与次郎が何のために、いたずらに等しい匿名を用いて ○ここに居住する人々が田園都市線を使って ○E商店が自家用トラックまで使って

○全体ぼくが零余子なんてけちな号を使わずに

次の例は表層構造が「が」でない例。

○其処の下女はみんな京都弁を使う ○三四郎と一緒に湯を使う気と見える ○与次郎は風馬牛という熟字を妙なところへ使った ○よし子は……「絶壁 ね」と大袈裟な言葉を使った ○迷える子〈ストレイシープ〉という言葉は 解った様である。又解らない様でもある。解る解らないはこの言葉の意味よりも、寧ろこの言葉のを使った女の意味である ○美弥子はかつて長い言葉を使った事がない ○三四郎の筋向うに坐っていた色の白い品の好い学生がしばらく肉刀〈ナイフ〉の手を休めて、与次郎の連中を眺めていたが、やがて笑いながら、II a le diable au corps と冗談半分に仏繭西語を使った ○三四郎は広田先生にならって翻訳と云う字を使ってみた ○三四郎は妙な意味に批評と云う字を使ってみた ○原口さんはこの間終始筆を使っている

○この方法を妙に用いるものが近来大分ようて

「に」の前に人間の行為を示す名詞がくることがある。人間活動の場のことも ある。使用の目的、用途などを示す。

△株価操作に使うな △ふだんは駐車場に使う △日本航空が乗務員の訓練 用に使って

(V3-53t) 「製造」の動詞 (2.386) 「作る」「作成する」「製作する」「こしらえる」など。主体は人間。作るものを意味する名詞 (1.4, 1.3など)に「を」がつく。

○ラリーはそれぞれの組が作成したスケジュールによりその精度を競うもので ○九段の銅像は原口さんと仲の悪い人が作ったんだ △同本部がつくった会社ゴロ ○今僕が即席に作ったことばだ ○広田先生の使うために古人が作っておいたような音がする △学者が「女性路線」映画をつくろうとする動き ○ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだからしかたがない。我々が拵えたものじゃない △数人の彫刻化の学生たちが、町の広場にすえるために巨大なベトコンの勇士の姿の像を製作している次のものは表層構造には「が」が出てきていない

○そうして、広田先生が大学へはいれる下地をつくる ○友達の医学士とかに頼んで、ふるえの留る丸薬を拵えて貰って、試験前に飲んで ○「じゃ金はできないのか」「いや外で拵えたよ」 ○親爺のために拵えてやった石塔 ○会員と名のつく程立派なものは拵えないつもりだが ○校内にうまやをこしらえて ○そして蒲団の真中に白い長い仕切りを拵えた ○下宿へ帰るのも面倒だから、途中で一品料理の腹を拵えて、美弥子の家に行った ○人工的よくこんなものを拵えたという所を見て置く必要がある ○それより美しい芸者の銅像でも拵える方が気が利いている ○若い女が拵を起している。これも人形の心に菊を一面に這わせて、花と葉が平にすきまなく、衣装の恰好となる様に作ったものである ○雲母〈マイカ〉か何かで、十六武蔵位の大きさのうすい円盤を作って ○先生は変人だから、求めて誰とも交際しない。然し此処で相当の機会を作って、接触させれば、変人なりに付合ってゆ

材料を示す名詞(1.5あるいは1.4)に「で」がつく。

#### 2. 白動詞, 受身, 可能, その他

前節1. においては人間の行動を意味する動詞について、特にそのなかの他動詞の用法について述べた。そしてそこで、動詞の主語が人間そのものを意味する名詞、あるいはそれに関係ある名詞、すなわち Belebt, Human という意味論的なメルクマールを有することを明らかにした。

ところで、同じく人間の精神行動を意味する動詞でも、自動詞のばあいは、必ずしもこのようにはならない。また、「れる」「られる」がついたばあいも主格との関係が変わってくる。「たい」という語がついたばあい、「てある」「ている」がついたばあいも異なってくる。そこで次には、このようなばあいの問題を取り扱ってみたい。

そこでまずはじめに、いわゆる対象語のことについていうべきであろう。従来の文法の立場では、まず主語と対象語を分けたりするのであるが、ここでははじめは分けずに述べてみたいと思う。すなわち形の上からするとあくまで「名詞+が+動詞」という expression を分析するという姿勢である。対象語というより次に述べるように、自他で対立のあるもので、他動詞の目的語になるものが自動詞の主語になる、とした方が、利用度が高いと考えられるからである。

#### 自動詞

次のようなケースがある。

○今度辞職した以上は容易口が見つかりそうもない。

このばあい「みつける――見つかる」すなわち「を見つける」「が見つかる」というような対立が存在する。これは他動詞の文では行為の対象であったもの(口)が、自動詞の文のばあいに「が」の前に現れるということである。(文献)対象語の定義とずれるかも知れないが、このような他動詞目的の自動詞主語化要素は、当然のことながら、人間ばかりでなく、その他の多くのものがなりうるのであって、その内容は、他動詞の各部分で述べた、「を」の前のこと

ばであるはずである。事実、自動詞と他動詞としては、たとえば

知る――知れる

理解する (その他) ――わかる

みつける――みつかる

きめる---きまる

見る(見せる) ----見える

間く――間こうる

伝える――伝わる

つかまえる(とらえる) ---つかまる

わける――わかれる

いいつける---いいつかる

もうける---もうかる

売る――売れる

にぎわす---にぎわう

立てる――立つ

とる--とれる

などがあるが、このうちたとえば「知る」「知れる」についていうと、

- ○途中でそんな事が知れると
- ○美弥子から洩れて、よし子に伝わって、それが野々宮さんに知れると
- ○三四郎ははじめて図書館にはいることを知った
- ○広田さんを知っている男

というような用法の対のなかでは、上に述べたことが立証されると思う。もっとも他動詞文の「を」の前が物や事であれば「知れる」が使われるが

○三四郎が美弥子を知ってから

のようなばあいは, 「を」の前の名詞は「知れる」の主語とはならない, というように, いろいろの穴がある。

もっとも、このような自他の対立がなく、自動詞だけの存在のものもある (「はやる」「にぎわう」など)。「人間が働く」「悪事を働く」、「仕事を する」「音がする」のように意味のずれのあるばあいは、やはり対応しない。 「与次郎にその使をいいつける」「与次郎がその使をいいつかる」のような対 立ちある。

しかしこのようなものを除けば一般に自動詞文の「が」格の名詞は他動詞文の目的語であるようである。このような、自動詞のグループの用法をまとめて次に示す。

(V3-1i)「感覚・疲労・睡眠」などの動詞(2.300)。主格は人や精神,人体の部分(1.2, 1.3, 1.5など)

△気分がせいせいした ○凡てが平隠である代りに凡てが寝坊気ている 後者の例はひゆ的。

○三四郎がへえへえと感心している。○廊下の四つ角に小使が居眠りをしていた。○彼がひる寝をして夢をみている間に ○自分の知っている男が失恋の結果世の中がいやになって ○味が出るまでかんでいちゃあ、歯がつかれてしまう ○見ていると目がつかれる

(V3-2i) 「気分・情緒」など(2.301)。「驚く」「うれしがる」「困る」「失望する」「悩む」「いらいらする」「いらだつ」「あわてる」など。主として人間およびその関係の名詞と結合するが,動詞によっては,人間の部分を示す名詞と結合することがある。

○三四郎が東京で驚いたものは沢山ある。○この題なら人が驚ろくにきまっている ○三四郎が驚いたのはどんな本を借りても、きっと誰か一度は眼を通していると云う事実を発見した時であった ○「それで十円」とよし子が驚いていた △日本側が驚いたのも当然 ○三四郎の魂がふわつき出した △そのピアティゴルスキーが、さすがに困ったのは ○こんどはこっちが困るようになった ○君が困るだろうと思って ○延びれば延びるほどよし子が困る ○人間はね、自分が困らない程度内で、なるべく人に親切がしてみたいものだ ○三四郎が失望したのは婦人席が別になっていて、普通の人間には近寄れない事であった △係員が頭を痛めるのは △若人が戦時中いらいらしていた ○伊地知がいらだつのも無理はない ○貴方が出て御仕舞に

なれば、後が困るじゃありませんか 〇世界が急に暗くなる。炎天で眼が眩んだ時の様であったが少時しばらくすると瞳<ひとみ>が漸く落付いて、四辺<あたり>が見える様になった 〇そのうち与次郎の尻が次第に落ち付いて来て 人具象彫刻が不振なのが気になる

(V3-4i) 「表情」の動詞「笑う」など(2.303)。人間が主体になることが多い

○与次郎が大きな声で笑い出した ○すると女が急に笑い出した ○すると突然原口さんが笑い出した ○画〈かき〉手と与次郎が笑い出した ○時には相手が笑っていて,何時までも要領を得ないことがある ○「それでその思い付が外れたら猶罪がなくって可い」と原口さんが笑っている「が」でない例(extrait)。

○美弥子は片ほおで笑っている ○三四郎と美弥子は一度に笑い出した。○ すると女も笑いながら ○与次郎はアハハと笑って ○女は笑っている。

(V3-6i) 「誇り・恥じ・気どり・ひがみ」の動詞(2.3041),「かしこまる」「しゃれる」など。主として人間であるが,人間の行動,行動のしかたが主格になることもある。

○傍に三四郎が畏<かしと>まって御給仕をしている ○色の出し方が中々 酒落ていますね

(V3-8i)「思考,知覚,知解」など(2.3060)。人間は「に」「(に) は」で示される。

- ○美弥子から洩れて,よし子に伝わって,それ**が**野々宮さんに知れている
- ○やりかけた途中でそんなことが知れると ○東京ものは気心が知れない
- ○日付と曜日が一目でわかるトリップ・メイト ○けれども三四郎にはその意味が殆どわからなかった ○三四郎は目のつけどころがようやくわかった ので ○三四郎には小さんの味わいがよくわかった ○三四郎にはその笑い の意味がよくわからない ○三四郎にはこの用語の意味がよくわからなかっ

た 〇むこうの人の顔がよくわからないほどに広い閲覧室 ○成程棧の具合が善く分らない ○実は始めてで様子がよく分らんのですが、○下宿へ行くところだということが分った △会社は投機もしてないことがわかったのである○錦絵のまちがいだということがわかった ○僕にゃ意味がわからない ○三四郎は言葉がわからない ○歯並びがわからない ○第一標題が分らんです ○よくその女のいうことがわかりましたね △それに三十万円を渡したことがわかり △内縁の妻である事実がわかり ○ラヴをした事がないものに女が分るものか △八木アンテオであることが、はじめて分った △二人とも無事であることが、サトーにはわかった ○三四郎にはこのお礼の意味が明らかに分った △当社株の放出がいつになるかわからない ○然し与次郎が何の為に、遊戯に等しい匿名を用いて、彼の所謂大論文をひそかに公けにしつつあるか、其処が三四郎には分らなかった ○こっちへ近付いてくるのが、地ひびきでよくわかる。

(V3-10i) 「試験・計量・探究・発見」など(2.3062)。 V3-10t の「を」の前のことばが主語になる。

○今度辞職した以上は容易に口が見付かりそうもないこと △反対側に左側 主翼が見つかった △これまでに発見された右主翼から胴体をまいた左主翼 が見つかった △同船の潜水夫がこれまで見つからなかった △最後の一人 がみつかるまで

(V3-11i) 「推測・判断」のもの (2.3063)。 (V3-11t) の「を」の前の名詞にが主語になる。

○広い戸外の肌寒が漸く増してくるので、帰ることに話が極る △飛車の位置がきまると互に王を囲い △広域指定がきまり △結極廃止の方向が決まった △このほど入賞作十点がきまった ○よし子は当分美弥子の宅から学校に通うことに、相談が極ったんだそうである △たまたま主演が決まっているマリナ・ブラディ △草笛の公演がきまったという △合併比率の改善が決まって

(V3-12i) 誤りの (2.307)。「まちがう」。主体人間行為。

(V3-14i)「見る」2.3090。「見える」「目にはいる」。(V3-14t)の「を」の前の名詞が主格になる。

○自然のままにたれた濃い髪が眉まで見える ○ちょっとはいるのを躊躇し た様子が見える ○目尻にたえがたいものうさが見える ○裾模様の小袖に 錦糸の縫いが見える ○家主の庭が見える ○そのまた底に背い空が見える ○端からは美しい襦袢の袖が見える ○なだらかな芝牛が見える ○高い窓 の外からところどころ木が見える ○ありありとさっきの女の顔が見える ○白いすすきを染めぬいた帯が見える ○廂髪の上に奇麗な裏が見える ○ 職が漸く落付いてあたりが見えるようになった △全体としては立ち直りの 方向が見えてきています ○「2」の字が見えます ○今度は正面が見えた ○三間へだてて美弥子の横顔が見えた ○御宿という看板が見えた ○広田 先生の長い影が見えた ○さっきの女の影が見えた △持前の出足におとろ えが見えはじめた △業績的には若干明るさが見えてきています △封じと め政策に転換の動きが見える ○その圧力が物理学者の目に見えるように ○それが電灯の光で、黒くうずをまいて見える ∧末広船長の姿がデッキに 見えないので ○連れといえば土間全体が連れとみえるまでだから ○二人 の姿が筋違<すじちがい>に見える ○黒いかげのふちが少しけむって見え る ○萩と南天の間に縁側が少し見える △三日目には疲労の色が少し見え ○青い地がすいて見えるほどにうすくなる ○瓶がふわふわするところが三 四郎の目にはいった ○この車**が**三四郎の目にはいったときから △アンダ ーヒップから持ち上げるようにしてヒップアップ,脚**が**長く見えます 〇向 うのはずれにいる人の頭**が**黒く見える ○それを半分程斜に捲ぐって、裾の 方が厚く見える所を避くよ>ける様に、女は窓を背にして腰を掛けた

(V3-16i) 「聞く」(2.3092)。 「聞こえる」

○人形で客を呼ぶ声が、折々二人の坐っているところまで聞こえる ○三四

即にはこの一言が非常にうれしく聞こえた ○会場の方で喝采の声が聞こえる ○遠くから荷車の音が聞こえる △女の悲鳴が聞こえ ○女の口を洩れたかすかなためいきが聞こえた ○すると座敷から美弥子の声が聞こえた ○やがて唱歌の声が聞こえた △廊下に足音が聞こえた △足音が聞こえただけで ○その正直がかえって皮肉に聞こえる ○その言い方が三四郎に許諾を求めるように聞こえたので ○どうです」という声が後ろで聞こえた

(V3-19i) 「表現・報知」(2.312)。「つたわる」cf. (V3-19t) ○竪沈された | という報が伝わるや、ベレン市民は

(V3-22i)「流行」など(2.330)。「はやる」。主語はいろいろ。 △エレキがはやればいちはやくエレキをとり入れ ○この二十世紀になって から妙なのが流行<はや>る。

(V3-23i)「労働」(2.332)「働く」「働きをする」「就職する」。人間,システムなどが主体。人間活動の場「で働く」「に就職」。

○この三十円がこれから先どんな働きをするかまるでわからない ○咄嗟 <とっさ>の機が過ぎて、頭が冷やかに働き出したとき、 △インドネシアの 紛争解決の動きの裏には、今なお悪化している経済問題の克服のため、新しい外交政策をとらねばならぬというねらいが働いている △同県の保健所に 就職したのは ○原口さんの諸機関が一度に働く ○頭が冷やかに働き出した

(V3-24i) 「衣食住」(2.333)。 「目がさめる」 「扮する」 「住まう」 「焼け出される」, 主体人間。

○翌日目がさめると ○うとうととして目がさめると ○すると半鐘の音で目がさめた △下から羽のはえた悪魔が空を飛んで追かけてきます。悪魔の翼が私の足にさわり、爪がとどくかというとき目がさめます ○そのかわりようが美弥子の家に同居して △19世帯が焼け出された △池袋で54人が、

焼け出された

(V3-25i) 「扮争する」。人物名に「に」がつく。

△ピーターセラーズが精神科の医者に扮した。 △その息子にはフォーサイズが扮する

(V3-26i) 「結婚・宗教的行動」の動詞 (2.335~6), 「嫁に行く」「とつぐ」 など。主体は人間。

○美弥子さんが嫁に行くと云う話じゃないか ○よく金持の娘や何かにそん なのがあるじゃないか,望んで嫁に来て置きながら,亭主を軽蔑しているの

(V3-27i)「遊び・騒ぎ」の動詞(2.337~2.338),「遊ぶ」「さわぐ」「あばれる」など。人間が主体であるが動物のこともある。

△近所のこども数人が無心に遊んでいた △社会党議員が騒ぎ出し、混乱 のうちに…… ○鼠が急に天井であばれ出し

(V3-28i) 「全身的動作」(2.3390)。「つかまる」。主体は人間,動物など。  $\triangle$ 付借訴欺をしていた男 $\acute{m}$ ,25日朝東京荏原署につかまった

(V3-29i) 「足の動作」の動詞 (2.3392), 「歩く」「歩む」「駈ける」「ふむ」「腰かける」「しゃがむ」など。人間が主体。

○僕が何でも大きな森の中を歩いている。 ○会場から逃げた人がちらほら歩いている ○又長い会話が出来兼るほど人がぞろぞろ歩くところへ来た ○三人が話しながら,ずるずるべったりにあるき出したものだから △死体が歩む死者が叫ぶ! ○小走りに与次郎が駈けてきた ○向うから車が<か>けてきた ○駅夫が屋根をどしどし踏んで ○待ち合せた三四郎の目には,女の足が常の土地を踏むと同じ様に軽く見えた。○只女が三四郎の筋向うに腰を掛たばかりである。○三四郎がそのなかへ,向う向きにしゃがんで

(V3-31i) 「行為」の動詞 (2.342), 「する」「役割をはたす」など。自動詞的な用語。主語は「感じ」「気」「音」「におい」など人間の五感に関係。 V3-31t とは関係しない。

○どことなく肌寒の感じがする ○安っぽい感じがして ○軽快な感じがし た ○一種妙な感じがした ○興味があるような気がした ○かけはたれて いるような気がした 〇三四郎はこの手紙を見て何だか古ぼけた昔から届い た様な気がした ○三四郎は落語の落ちを聞くような気がした ○この間見 た女のような気**が**してたまらない ○何だか鼓の音を聞いていると全く二十 世紀の気がしなくなるからいい ○いかにも愚物のような気がした ○再び ほじくり出してみたい気がした ○霞の中へはいったような気がした ○写 真に取って眺めているような気がする ○なんだか安っぽい受け付けの気が する ○日本人じゃないような気がする ○三四郎は惜しい気がする ○ど こかに欠陥ができるような気がする。○奇特なような気がする。○実世界は 危くて近寄れない気がする ○少しほらのような気がする ○美弥子のとこ ろへ行く用事が出来たのはうれしいような気がする。○命に奥行があるよう な気がする ○一町ばかり遠のいたような気がする ○相手はばかのような 気がするにもかかわらず ○まるで人種が違うような気がする ○大いにか つ盛んに読んだような気がする ○どやされたような気がする ○欽明天皇 の御代でも差支ない気**が**する ○野々宮君の駆付け方が遅いような気**が**する ○ ○ おめでたい気がしますか ○三四郎はいささかめいわくのような気がし た ○どこか啓発されたような気がした ○聞くのが恥かしい気がして ○ 幾分かきずつけられるような気がした ○もどる気がしない ○ばかにされ たような気がした ○唯一の資格のような気がしていた ○帰らないでもか まわないような気がする ○甚だたずねにくい気がする ○損料で借りてい るような気がする △一寸簡単すぎるような気がする ○またひっぱられた いような気がする △時期尚早という気がする ○晴れたのがうらめしい気 がする ○甚だ心もとない気がする ○全くだめのような気がする ○女に はとてもかなわないような気がどこかでした ○注意を一車に集めている気 色**が**した ○神主が装束を着けて、これから祭典でも行おうとする間際には

とう云う気分がするだろうと ○相手は無論いやな心持がする ○三四郎は 妙た心持がする ○講義の価値があるような心持がする ○はじき出された ような心持がした ○三四郎は真実に能本を出たような心持がした ○古い 寺を見るような心持がした ○火の消えたランプを見る心持がした ○国に いる方が寝易い心持がする 〇日当の好い畑へ出た様な心持がする 〇女王 の前に出た心持がした 〇その時急になつかしい心持がした ○遠くかつは - るかな心持がした ○何となく異性の見方を得た心持がした ○気恥かしい - ような妙な心持がした ○学者になったような心持がした ○なんだか旧式 でいやな心持がする 〇西洋料理の味がするだけで 〇なんだかばかみたよ うな味がする ○明治15年以前の香がする ○妙に西洋のにおいがする ○ \*美弥子の頭で香水のにおいがする ○頭痛がして ○翌日はすこし熱がする (新潮文庫 248 ページ) ○廊下に足音がする ○ところへ玄関に足音がし た △男の手からポッと音がして ○突然どたりばたりという音がして ○ 大きな音がする ○遠くから町の音がする ○打つには打ったが音がしなか った ○古人が作っておいたような音がする ○奥の方でヴァイオリンの音 がした ○やっぱり風の音がする ○「おい」と人を呼ぶ声がする ○わあ という大勢の声がする ○坐敷で話声がする ○茶の間で話声がする ○急 に高い声がしだした  $\bigcirc$  「もう少しの間」という声がした  $\bigcirc$  女の声がした ○…の前までくると人声がする ○どこかで人声がする ○庭の先で虫の声 がする ○人が倒れる物音がした ○するどい香がぷんとする ○○孁が羊の形をしている ○せっつきばえがしない △北爆停止はこれによ

○雲が羊の形をしている ○せっつきばえがしない △北爆停止はこれによって外交より効果的な役割を果たし

(V3-32i) 「失敗」(2.342)。「失敗する」 へ米国はまだその平和攻勢が失敗したとは思っていない

 $(V_3-33i)$  「交わり・応接」(2.350~1)。「分かれる」。主体人間。別れるあいてを「に」で示す(人間)。

○西洋料理屋のところで野々宮に別れて ○三四郎は赤門のところで二人に

分かれた ○三四郎はよし子に別れた ○三四郎も女連に別れて下宿に戻ろ うと思ったが ○ひげの男は別れるときまで名前を明かさたかった

(V3-35i) 「競走・攻防・勝敗」の動詞 (2.353),「勝つ」「打ち勝つ」「屈する」「負ける」など。主体は主として人間。主として人間をあらわす名詞に「に」がつく(競走などの相手)。

△総選挙で予想通り労働党が大勝 ○与次郎は真面目である。先生はにやに や笑っている。とうとう真面目の方が勝ってともかくも見る事に相談が出来 て △日本が勝つまでの辛抱 △大映ガメラ対バルゴンどちらが勝つか ○ 甲の女が乙の女に打勝つ色ではなかった △キ首相が、仏教徒らの反政府デモに屈して ○物が小さくなればなる程引力の方が負けて光線の圧力の方が 強くなる

(V3-38i)「命令」(2.367)「いいつかる」。主体は人間。

○与次郎がその使をいいつかった

(V3-40i) 「頼り」ほか(2.3681)。「気に入る」主語はいろいろ,「こびる」主体は人。

○この目が気にいったから描いている △……というのが気に入りました

○生活に疲れてという句が少し気に入った ○なぜ「寄席」がこんなにもてるのか ○卑しく媚びるとは無論違う。見られるものの方が是非媚びたくなる程に

(V3-41i) 「取得」(2.370)。 「とれる」cf. V3-41t 「欠ける」
○まるで平衡がとれない ○つりあいがとれない ○意志にかける
所有などの対象となるものを示すのに「欠ける」のばあい「に」を用いる。

(V3-42i) 「損得」(2.375)。「もうかる」。「もうかる」は「もうける」と対。

○あっちの方が金がもうかる ○だらしなくたくさん売る方が、大体の上に おいて利益だから

(V3-44i) 「取式・売買」(2.376)。「売れる」

○どうせいくら切符が売れたって ○雑誌が売れないからなかなかよこさない

 $(V_{3}-47_{i})$  「貧富」 $(3.37_{9})$ 。「にぎわう」。主体は「町」その他人間以外。 「人」は「で」を伴うことがある。

△化学株が賑わう △非鉄株が賑わった

(V3-48i)「工業」(2.382)「立つ」。(cf. V3-48t)

○大きな建物がところどころに黒く建っている ○小さな門が道のむこうに まるで関係のないような位置に立っていた

(V3-49i)「運転」など(2.383)。「はこぶ」

○どこまで事が運んだか聞いてみると

## 受身

受動文の変形の基本は

 $(N_1$  が)  $N_2$  をV する $\rightarrow N_2$  が  $(N_1$  に) V されるであろう。 ( ) は選択的である。

 $N_1$  が  $N_2$  にV する  $\rightarrow N_2$  が  $N_1$  にV される

というばあいもあろうが少ない。

基本的な変形の内容は、このばあいも同様に、他動詞の目的語が受動文の主語になるのである。 pattern recognition とすると末尾の「れる」「られる」と動詞および動詞の種類が使用できよう。

 $(1, 1 \cdots 2, 342)$ 

△ウイルスや化学物質に胎児が最も強く影響されるのも △燐化合体が配合されている △……副長官制にしようという内閣案が、こんどは、さきの臨時国会で……内閣補佐官制に変更されるという ○このばかみたようなあいさつが上下で一句交換されると △押問答が繰り返された △時々談話が交換されつつあるらしい △協力問題についても意見が交換されるものと見られる △各闘争が昨年の半日休暇闘争に集成された △戦闘が再開されれば △東京モスクワ空路が早ければ6月から開設される △世界的な音楽家が依嘱され △産業都市づくりが推進される △税制が改正されました △見通しが改善される △戦闘が開始される △試験が中止される △ブラジル商船がドイツ潜水艦に撃沈され △このような「うちわ話」が公開され △すべてのものが破壊され △ことしから声楽が追加され △予算措置が一層充実され

(2.30...)

△……などに政治的意図が感じられる △平和共存が広く理解されつつあり △災害原因と保安管理の責任の結びつきが注目されている △「組合指向」 の方式が取られている ヘユエに対しては何らかの措置が取られようが △ に選ばれ 人21人の死亡が確認された 人未発見の左主翼が確認された 人 来期は好転が見込まれます △前年の三倍半の予算が計上された △これが 研究され △5万トン以上の収穫が予想される △夜行組が殺到することが 予想される △約三万人の入山者が予想され △全員の参加が予定されてお り △海外取材が企画されていた △いくつかの好ましい現象がみられたか らである △依然根強い買気が見られる △弱電株などに買物が見られた △小口の物色買いが見られる程度 △しごとの世界と私的な世界の混同が見 られる △「ベトナムに平和を」などのスローガン**が**見られる △後天的な 場合には手相に特徴が見られないそうだ △会議ではかなりの動揺が見られ △小繋事件が最も注目され △日本の「認識不足」が指摘され △学生の間 では「調停案」が伝えられ △南ベトナム政府軍の士気低下が伝えられる △20本近い番組が放送され △親密な雰囲気の中で経済開発が討議され △ 戦争末期の終戦への努力が正確に記録されており

(2.32, 2.33)

△立てなおしをはかろうとする青写真が描かれている

(2.34...)

△麻薬の密売など悪徳の限りが公然と行なわれた △不利益処分がされていない △各政党の放送討論が盛んに行なわれている △同会議がこれまで随時行なわれてきた △8周年を記念した観閲式が行なわれ △その水準まで 株価修正が行なわれ △女王演説の生放送が行なわれたという △美的淘汰 が行なわれた △野党間の駆け引きが行なわれよう △建設が行なわれるものとみられる △恒例の入場式が行なわれ △働きかけが行なわれた △徹底した努力がなされ △パーシーフェース楽団のレセプションが,9日午後 3時から東京日比谷の日活ホテルで行なわれた △このほど落成式が行なわれた △都民コンサートが日比谷公会堂で開かれる △僕がその女のために 不具にされる △同僚や上官たちが死刑を執行される前

(2.35...)

△一座の黒人ダンサーが食事を断わられた △日本でも 450 社以上がこのショーを許され △都知事を任命することが紹介された △同地方の急激な発展が約束される △沖縄が攻撃された際

(2.36...)

△14人が起訴された △学生三人が都公安条例違反で検挙された △内田経済局総務参事官が大臣官房総務参事官に起用された ○三四郎は画室へ導かれたとき △明渡が勧告された △第二空港または拡張が要望されている大阪国際空港 △黒人が白人に誘惑されるところ ○与次郎がどう叱られたかきいて △黒ん坊の王族が英国の船長にだまされ

(2.37...)

〇「にんべん」のかつおぶしが重宝された  $\triangle$ 松森勇さん(49)が荒波にさらわれゆくえ不明  $\triangle$ 図書館が受験生で占領され  $\triangle$ 経費は約80パーセントが授業料でまかなわれ  $\triangle$ 株が大量に売られた  $\triangle$ 日産自が売られた  $\triangle$ サッポロ一番が発表され  $\triangle$ 15800 円が30日に支給され

#### (2.38...)

△新しいホテル、カシノがどんどん建てられている ○すべてのものがまた 同時に建設されつつある △豚が運ばれてゆく △芥川竜之介の未定稿が三 編掲載されている △写真がかざられていた △一般投資家のために投信が 運用される △古くからぶどうの酢が使われていた △次第に土地が造成され △女性の要望にこたえて人工の顔がつくられる

なお「れる」が「可能」を意味するばあいも同様である。

△数の子やキャビアがふんだんにたべられる ○平気で見物がしていられる ものじなゃい △有力な手がかりが得られ △可決に必要な票が得られず △工業用水が得られる

## 可能動詞

△小うた、俗曲、民謡が歌えて踊りもうまい △世界で真に歓喜の歌が歌えるのはいつのことか △録音中の音が聞けるスピーカ・モニター △ニュースが聞けます △それが自然にやれる人は ○辛棒がしきれなくなった △決定的なことが言えるまでには時間がかかる ○気の利いたことが言えないたちである ○三四郎はますます日記が書けなくなった ○不幸にして絵が描けない △三二の魅力がずばり味わえます △二幕目から全体の意図がおぼろげながら感じとれた △「茶碗むし」「おでん」などが、おいしくつくれます △高級レストランの味がつくれます △受験生の答案しらべを引き受けたときの手当てが六十円このごろになってようやく受けとれた △活動の割前が払えるかというと ○それがばかとも思えなければ、わがままとも受けとれない △自分の体調がつかめなくて ○つりあいがとれない △会談日程が十分とれない

このばあいも他動詞の目的語であったものが、自動詞の「が」の前に来ている。他動詞の可能動詞化として処理できる。自動詞はもとの主語がそのままのことがある。

#### 「てあるし

動詞に「てある」がつくと、「がしの前のことばが変わる。

○彫刻がほどこしてある ○そんな装置がしてあるのだろう ○その顚末がくわしく書いてある ○そばにちゃんとかながふってある ○stray sheepという字が無暗に書いてある ○なるほど自分のうちの庭がかきかけてある ○非常に難儀をすることが書いてあるのだそうだ ○墓の中に花を投げることが書いてある ○きれいな女が、かいてある ○絵の具がぬってある ○車の羽が五色に塗ってある ○落第という字が見事に彫ってある ○前垂の縁がレースのようにかがってある ○左右に芝が植えてある

「彫刻をほどこす」から「彫刻がほどこしてある」というように他動詞の目的 語が自動詞の「が」の前にくる、という変形。

## 「たい」

「たい」ということばがつくと、「が」の前が変わってくる

○もう一遍学生生活がしてみたい ○人に親切がしてみたいものだ ○はっきりしたところが知りたくなった

「だれかが人に親切をする」から「だれか(その人)が人に親切がしてみたい(と思う)」のように変わるのであって、「学生生活をする」「はっきりしたところを知る」から生じたと老えられる。変形された文の「が」の前には他動詞の目的語がくる。

以上のように「~を」が「~が」に変わるケースが多いが,これらはまず形の上での大きな類似点をもつものの,細部においては異なる点がある。田村すぶ子氏は次のように述べておられる。(文献12)

「しかし自動詞文のパターン,受け身のパターン,希望形,可能形のパターンは,みな構造が異なる。同じく「を」が「が」に変わると言ってもその変わり方が違うのである。自動詞文化の場合は,他動詞文で行為の対象を表わす成分(目的語)であるために「を」を伴うものが,自動詞文では行為の主体を表わす成分(主語)であるために「が」を伴う、受け身文化の場合は基本文で行

為の対象(目的語)であるために「を」を伴うものが、受け身文では「られる」 rare~are の主体(主語)であるために「が」を伴う。希望形、可能形の場合は、その希望動詞、可能形動詞がその行為の対象を表わす名詞に「が」を伴わしめるのであり、この場合その名詞句は自動詞文化の場合のように行為の主体でもなければ、受け身文化の場合のように接尾語の主体でもない。」

### 使役

使役の助詞がついたばあいは、次のようである。

△劇団が金を献納させていたとか、無理にしごとをさせたとかいわれている ようだが、そういう事実はない ○あれじゃ僕が門下生に描かしたといわれ るはずだ

このばあい,「が」の前は「……させる」主体が来,「させる」をとった動詞本来の動作主体はやはり人であって助詞「に」がつく。(文献11) これは,いままで述べてきたものと,基本的に異なる。

# 参考文献

- 1. 「分類語彙表」(国立国語研究所資料集6,林大担当)1964
- J. Bechert, D. Clément, W. Thümmel, K.H. Wagner: Einführung in die generative Transformationsgrammatik. Linguistische Reihe, Band 2. Max Hueber Verlag 1971.
- 3. 金子享編「生成変形文法入門」1972.
- Ch. Bally: Linguistique générale et liguistique française, A.
   Franke 1950.
- 5. シャルル・バイイ著小林英夫訳「一般言語学とフランス言語学」1970
- W. Klein: Parsing. Studium zur maschinellen Satzanalyse mit Abhängigkeitsgrammatiken und Transformationsgrammatiken.
   Athenäum 1971.
- L. Tesniére : Eléments de syntaxe structurale. C. Klincksieck.
   1966.

- 8. 佐久間鼎「日本的表現の言語科学」1967
- 9. 大久保忠利「日本文法の心理と論理 | 1970
- 10. 南不二男「文法」(『国語学』89,昭和45.46年における国語学界の展望,所収)1972
- 11. 北原保雄「助動詞の相互承接についての構文論的考察」(『国語学』83) 1970
- 12. 田村すゞ子「対象語に『が』を伴わしめる語について」(早稲田大学語 学教育研究所紀要10所収)1971
- 13. 福渡淑子「連語について(その1,名詞+「を」+動詞の型)」 『情報処理学会 Computational Linguistics 研究委員会資料』71-3
- 14. 石綿敏雄「助詞『に』を含む動詞句の構造 | (国語研報告46所収)
- 15. T. Ishiwata: Méthode pour résoudre l'ambigüite dans le traitement automatique du langage naturel. "SMIL" 1972